

本格的なりハビリを始めて

入院二カ月もすると、妻の力はもう限界点に達していた。入院以来、私に付き添って夜も十分に眠らない日が続けてきた妻の表情には、ようやく濃い疲れの色が見えてきた。私も急性期の最悪の状態を脱出したので、十月になると早々に十三階の病室に移ったが、そのとき、私と前後して十三階の二人部屋に移った方の付添いさんと妻は仲よしになっていた。

その付添いさんは隣のベッドで患者さんを熱心に介護するかたわら、その豊富な臨床体験を妻に話して聞かせてくれた。その豊富な知識経験と真剣な態度にすっかり感心していた妻は、

「手がすいたら主人の付添いをしてリハビリをお願いできないかしら」と頼み込んだのである。

彼女は、「もう付添いはやめて商売しようと思ってるんだけどね」と言っていたが、再三の妻の依頼に根負けして、「奥さんも大変なのね、いいわよっ、でも十二月になってからでいい？」と承知してくれたのである。

これが私のリハビリの恩人金子久美子さんである。

「寝たきりになりたいのか」

十二月十一日、お願いしていた金子さんが付添いとして私の訓練をみてくれるようになった。彼女はリハビリをずいぶんと研究していて、いろいろと工夫してくれたが、肝臓障害以来、すっかり落ち込んでいた私が、少しも積極的に訓練しようとしないので見ると、

「森山さんは寝たきりになりたいのか」

と鋭い問いを発した。私が返事に詰まっていると、彼女は私に向かってさらに言葉を継いで言った。「寝たきりになる前に、寝たきりの人ってどんなものか一度見せてあげるからおいで」

そう言うと、私を通称「植物人間病棟」の廊下に車椅子で連れていった。三階がその病棟で、一般人の入室は実は禁止されていたのだそうだ。意識はないが生体反応はある人たちは、失礼な言い方だが、ちょうど丸太ん棒に着物を着せた「物体」のような存在だった。毎日の点滴注射で栄養剤を補給しつづけ、床ずれの傷手当てをしているから、命は保っていた。廊下から見える病室には、そんな重症の患者が大勢いた。うつろに開いた目は光もなく焦点も結んでいない。たぶん何も見えていないのだろう。

そのときの鮮烈な印象を言葉にするほどの表現力を私は持っていない。

そこには私の知らない世界があった。人は意識を失っても生きていくという事実があった。一度その姿を見て以来、二度とその廊下は通らなかつた。

「私は絶対になりたくない」

この光景は、私のリハビリにすいぶん強い刺激になった。それと同時に、前にテレビで見たマラソンの光景を思い出したのである。

それは日曜日で検査も訓練もなく、病院はのんびりした空気に包まれている日だった。札幌の秋の光は美しい。太陽が名残りの恵みをふんだんにばらまいていく。

窓の外の風景に見飽きてテレビのスイッチを入れると、見なれた双子のランナー宗兄弟が胸をそろえて駆けている。北京の街らしい。北京の空もきれいに晴れ渡っていた。宗兄弟は胸をそろえて北京の街を駆け抜けてゆき、驚いたことに胸をそろえてゴールのテープを切った。完走することさえ大変な競技なのに、二位以下を大きく引き離しての同着優勝という偉業である。「すごい」のんびりとテレビ画面を見ていた私の心に感動の戦慄が走った。

あれは発病する一年前のことであつた。その年の夏にはロサンゼルスでオリンピックがあり、マラソンの日本代表に兄弟で選ばれた二人は、オリンピックの日程に合わせて最後の練習を北海道で行なっていた。そのころ機会があつて二人と話したことがある。

「一日練習を休むと、筋肉はすぐだめになりますからね」

「だから私たちは、涼しい北海道に来てまでして筋力のトレーニングをするんです」

「三日も休んだら筋力が低下して、それを取り返すのには一週間はかかりますよ」

と控えめに語った言葉と、それを裏づける真剣な毎日の練習態度が、当時、まだ元気だった私にも強く印象に残ったことを思い出した。

彼らは常にオリンピックの優勝を目指しているが、そのオリンピックに出場できるのは国内の予選を勝ち抜いた選手三人のみである。予選に落ちれば、彼らには次のオリンピックまで四年間はチャンスがない。その四年間は黙って精進するのみである。孤独の戦いといわれるこの競技では、たぶん自分に打ち勝つことが大事なことだろう。自己管理の不手際で体調を崩せば、結果は惨敗に終わる。精神力の弱さは弱気につながり、せっかくの實力を發揮することができない。筋肉トレーニングの不足が競技途中でのダウンにつながる。栄光のゴールはその毎日の努力の向こう側にしかない。

マラソン選手がオリンピックでの優勝を目標にして黙々と訓練に集中するように、片マヒの私がリハビリの分野で世界一を目指したからといって、だから苦情一つあるはずもない。そうだ。私も彼らといっしょにオリンピックを目指そう。そして、世界一のリハビリ成果をこの手に収めよう。そのためにはリハビリの成功に向けて訓練に集中するしかない。しかも、私には四年間待たなくても、チャンスは常にあるのだ。

このとき私自身がブラックホールに吸い込まれるように、あの寝たきり世界への入り口に立って、全く抵抗もなく引きずり込まれようとしていたのに気づいた。いや、そんな無抵抗な私自身が鏡に写し出されて見えてきたのだ。

人間を人間たらしめる特質とは、なんだろうか？

筋肉とは、どうすれば動くのだろうか？

神経の回路はどうなるのか？

わからないことはわからなくていい。皆がよいと言うことを真剣に実行しよう。そして私は、人間として人間らしく生きてゆく状態にまで回復しなければいけないと、心の奥深くに誓ったのである。

その日から、入手できる参考文献をあさり、片端から読み始め、金子さんの指導で朝晩の体操、歩行訓練を黙々と始めたのである。

車椅子を捨てるために

このころから、私のリハビリ訓練に対する心構えが変わってきた。とりあえず、歩く力を取り戻したいと思った。それにはまず、車椅子を捨てなければいけない。自分の足で歩かなければいけない。

私は金子さんの肩を借りて歩く稽古を始めた。

「右足を上に上げて。ほら、前に出して」

一足の歩行が、どんなにすばらしいものであるかを初めて知った。五メートル、十メートルと少しずつ肩にすがって歩くことができた。

やがて、私は車椅子を捨てて杖で歩く許可をもらった。

私の入院していた大きな病院も、日が暮れて外来患者の診察がすんでしまうと、二階廊下は閑散と

なる。そのかわり夕食がすむと、外来患者と入れ替わって入院中の患者が集まり、そこは自主的な歩行訓練の場所に早変わりする。

私の右足は力なくだらりとつま先を下に向けていて、そのまま歩くことは危険だったので、垂れたつま先に包帯を巻き、その端を膝に固定してつま先を引き上げた。腰には白い「命綱」と呼ぶ兵児帯へいこおびを結び、危険なときにはいつでも側の金子さんが手を出せるようにして杖を突きながら静かに歩く。いろんな人が夜の廊下に集まっていた。体のバランスがとれなくて苦心している人、汗にまみれ、懸命に努力する人。そんな中で印象に残ったのは、再入院をして車椅子に自分の人生を託し、どっぷりと病気の世界に安住している人、医師の指導を無視して喫煙し、将来の希望をなくした人たちの行動だった。

「あの人、人生を投げているんだよ」と言った金子さんの言葉は心に残った。これは金子さんの私に對する叱咤でもあり、激励でもあった。

「人生は希望を失ったらほんとうにだめになるんだな」

偽らない実感であった。元気のいい人がどんどん歩く後ろ姿はうらやましくてしかたがなかった。

「私もあんなにして歩けるだろうか」自由にならない足元を見詰めて自問自答しながら、「今に見ておれ、僕だって」一歩一歩と暗い廊下を歩く日が続いた。

私が自分でやる気を起こしたのを見ると、金子さんの訓練も厳しさを増した。私は歯を食いしばってそれに耐えたが、ときとしてあまりの苦痛に思わず悲鳴を上げ、マットの上でのた打ち回ることも

あった。そんな私に彼女は、

「森山さん、いつまでも手足が動かんでもいいなら優しくしてやるよ」

「構わん、やってくれ」

そんな会話を重ねて必死の努力が始まった。

訓練室での「森山さんの訓練」は、ちょっとした名物になった。大の男の私が金子さんに手足の関節や筋肉を伸ばされては「痛い、痛い」と泣き声を上げる様子は、仲間から、「森山さんが泣かされるところはおもしろいね」とからかわれもした。夜になると、筋肉の痛みを少しでもやわらげるために、右半身には湿布葉をべたべた張らねばならなかった。

リハビリに「地獄」を見た

こうした毎日の私の戦いは、激しい痛みとの対決であった。

私たちの祖先は東洋でも西洋でも「地獄」という死後の世界を生み出しているが、今の私が毎日味わっている苦痛は、きつと祖先が考えた地獄そのものに違いないと思った。なぜか私はいま地獄の責め苦にあえいでいる。こんな地獄から救い出してくれる人はいないのか。

そのとき突然、ダンテの『神曲』が頭の隅に浮かび上がってきたのである。といっても、これまでにあんな難解な詩をまじめに読んだことはなかった。将来、いつかは読もうと思いつきながら、中学生のときに父の古い蔵書の中にあつた『神曲』のページをパラパラとめくり、挿絵を眺めただけだった。

そんなあいまいな記憶だったが『神曲』の中では、いったん地獄に落ちた「人の魂」が救われるためには、つらい「煉獄の火」の中をくぐり抜けて清められねばならなかったんじゃないかな？ たぶん、ダンテが恋をしていた美しいベアトリーチェが出てきて、彼女の手引きで最後はようやく無事に天国へ行けたんじゃないかな？ 違つたかな？

ダンテが説こうとした『神曲』を離れて、私の頭の中では、いつしか新しい『神曲』が生まれていた。マヒに続いて起きる肉体的な苦痛と、手足の不自由からくる心の煩悶に直面した私は、「これが地獄だ」と思っていたが、しかし、煉獄の火で清められたら生まれ変わる事ができるかもしれないと思えてきた。このリハビリの苦痛は、私が生まれ変わるために必要な煉獄の苦痛なのかもしれない、と思ひました。その私を救いに来てくれるのはベアトリーチェでなければならなかった。ベアトリーチェは「ひよつとしたらうちの妻かなあ」と考えました。ダンテが怒って「私の作品を正しく読んでくれ」と言うかもしれないが。

私たち障害者が最も注意しなければならないのは、「心が萎える」ことだ。なぜかダンテを思い出したときに、たまたま高等学校の哲学の先生でキルケゴールが好きな先生がいらしたことを思い出した。私は不勉強なため、キルケゴールを読んでいないが、彼の言葉である「死に至る病は、絶望である」が頭に浮かび上がってきた。

「望みを捨てるためになるってことだろうか」

と妻に言うのと、

「そうなのよ、金子さんにも聞いたけど、希望を捨てた人は二度と立てないっていわね。あなたは手足が萎えていても、立派に自分の尊厳を守って生きてゆけるけど、気持ちが悪く落ちて込んで心が萎えてしまったらどうにもならないのよ。わかって」

という返事が返ってきた。

そうなると思ろ度胸が座り、この状態との戦いは簡単にはいかないから慎重に対処しようと長期戦を覚悟した。

再び立ち上がって

こうして歩くことができるようになると、今度は歩きながら次の計画を頭に描いたり、いろいろな問題を考えて整理することも、少しずつはできるようになった。

妻には大勢の人が、偉い先生方の本を持ってきて、「先生方の書いてることを読んでおくと参考になるよ」と参考書を見せてくれたようである。私も私なりに一生懸命に、自分のマヒについての知識を吸収する努力をつづけた。

さらに、階段の昇降もエスカレーターの乗り降り訓練も、金子さんの技術指導で行なった。

私の病室は十三階の廊下の西の端にあったが、杖を突いて長い廊下を歩き、中央のエレベーターホールとナースセンターの前を通り抜け、東の端に出ると、そこに緊急用の階段がある。その階段を降りるときには、杖を一段下の段に突き、悪い足を下ろしてから次によい足をそろえる。悪い足を後に

残すと始末が悪い。上がるときは、階段に杖を突き、杖で支えながら悪い足を上の段に乗せ、次に左足をそろえる。

むずかしくて勇氣が必要なのは、動いているエスカレーターにタイミングを計りながら乗り移ったり、終点で同様に足を踏み出すことだった。

「いいかい、悪いほうの足から乗るんだよ。間違えるとだめだよ」

と金子さんがすかさず声をかける。エスカレーターの踏み板が動くのにタイミングを合わせてベルトを握りながら右足を踏み出す、と同時に慌てて、よい足を乗せて体のバランスをとる。降りるときは要領も同じだった。

年末になると、私の歩く力も増し、金子さんに付き添ってもらえば、十三階の西端から東の端まで歩き、階段を降りて十二階の東の端から西の端まで歩き、また階段を降り、最後は二階から一階に通じるエスカレーターを乗り降りする訓練をして一階に行くことができるようになった。

訓練室でのきまった訓練に加えて、廊下にある手すりにつかまったり、階段の踊り場を利用して、ひとりで関節や筋肉を伸ばす運動もした。訓練室が閉鎖される日曜日にはマットをベッドの横に広げて特訓してもらった。金子さんはせっかくの休日でも、私の固い関節を柔らかくしようと、喜んで協力してくれたのである。

こうして肝臓障害と亜脱臼という追い打ちに遭い、いったんはドン底に落ち込んだ私が、再び一歩

一步と機能回復の階段を上り始めたのであった。私は歯を食いしばって自分の足で歩いた。そうしないと、再び立ち上がる活力は生まれてこないと知ったからである。

元気なころ、「人間、希望をなくしたらだめだぞ、いつも希望を持ってゆこう」と口癖のように若い人に話していた私自身だが、いざ、自分がこんなドン底に落ち込んでいても希望を失わずにやってゆけるか、実はまだ自信はなかったが。



なかなかの腕前だったゴルフ。「こんな姿はもう二度と見られないだろう」と妻も娘も思っていた。

そのとき妻は

リハビリ再開の許可が出て、今度は失敗しないようにと、夫も私も慎重になりました。

手足は早くも拘縮が始まりかけていましたので、動かすと筋肉が切り裂かれるほど痛いそうです。涙を浮かべんばかりにしている夫の手足を動かすのは、とても苦痛でした。「痛いっ」と顔を苦痛にゆがめる夫の顔を見ながら手足を動かすことは、とうていできませんでした。

さらに腿の筋力をつけるために、車椅子に座り、皮のベルトをその足首に巻きつけた姿を見たときは、鎖につながれた囚人の姿が連想されて、とても悲しくなりました。

きっと私も疲れていたのでしょう。ふがいなくも、血圧が下がり頭がふらふらして、何をするのも大儀になってきてしまいました。今やらなければと思っても、体が動きません。さらに拘縮して痛む筋肉をもみほぐしながら、少しずつ動かしてゆく方法は根気が必要ですが、私にはとてもつらくてできませんでした。それで無理に昼間だけでもと思い、金子さんに手伝ってもらいましたが、他人にお願いしてよかったと思っています。

夫のリハビリがなんとか軌道に乗り始めると、それまで夫にだけ向いていた私の関心は、暮らしの雑事にも向くようになりました。われながら現金なものだと思いません。

その第一は、やはり病院の支払いのことでした。

病院では十日間区切りで請求書が作られ、手元に来ます。CTとか脳波をはじめとする諸検査の費用、高圧酸素治療、点滴などの治療費、部屋代など、手術こそしなかったものの、脳梗塞の治療、入院費用は、最初の月

は百万円近くの金額だったと思います。

夫の会社の健康保険組合と、やはり会社の共済組合が負担してくださったので、結果的には自己負担とはならずありがたいことだったのですが、それでも請求書の大きな数字は、夫が倒れた家庭には不気味なものです。若いときから「こんなに高い保険料を毎月とられて……」と思っていましたが、こんな形でお世話になろうとは思いませんでした。

しかし、そのほかにもお金は「ゴーゴー」と音を立てて流れ出ていきます。「そうだ、保険があった」と思いついて、まず郵便局へ駆けつけました。簡易保険証書に病院の診断書を添えて出すと、「わかりました」とすぐ保険金を払ってくれました。

その足で、ある生命保険会社へ行くと、そこでは、

「会社の規定では、ほぼ寝たきりくらいの症状でなければ支払いはできません」と言います。私が契約の際、うっかりしたのかもしれませんが、「障害・疾病保証」の言葉に、だまされたような気がしたものです。

退院・元の職場に戻れず

当時、私のリハビリへの励みは、元の職場へ戻りたい、以前と同じように仕事をしたいということだった。ともすると、くじけそうになるときも、この希望に支えられていたと思う。後になって考えると、自分のおかれた状況を正確に把握しておらず、地についた療養態度ではなかったと思うのだが、それに気づくには、まだ多くの試練が待ち構えていたのである。

これも後になってしみじみ思ったことなのだが、私のような会社人間が、病気という突然のアクシデントによって「心ならずも」職場を去ることにならなかったら、やがてくる退職という人生の節目をうまく乗り越えられたろうか。その後の人生をどう生きたいか。必ずしも幸せな後半生とはならなかった気がする。

発病は不幸なでき事ではあったが、健康なまま退職していたら、生涯、なんらかの形で会社とつながりを持ち続け、いわゆる「仕事」以外のもの——自然の美しさ、家族との語り、いろいろな人との交わりなど——に目を向けることも知らず、生を終わったかもしれないと思う。

それはさておき、入院生活は、幾つもの小さな波をくぐり抜けながら、続けられた。

厳しい妻の励まし

リハビリに家族の温かい励ましは大事であるが、それは患者に何不自由ない生活をさせることではない。励ます言葉とまなざしは必要だが、自分で「する」、「させる」ことが大事なのである。

とはいえ、リハビリの成果が思ったとおりに上がらないと、つい、熱意が冷めてくる。そんな私を見て妻は、

「あなた、病は気からというくらいだから、リハビリには気持ちが一番大事ですよ」

妻は厳しかった。妻が厳しくなければ、それほど意志が強くない私には、自分のわがままを抑えることはむずかしい。放っておくと、ようやく前向きになってきた心の動きも逆戻りをして、心が萎えしぼんでしまう。温かいが厳しい妻は、やはり私のペアトリーチエだ。

十二月のある日、回診のときに院長の中村順一先生が私に言った。

「森山さん、鍼というものがあるんですが、ご存じですか」

「はあ、効くということは聞いていますが、やったことはありません」

「これは個人差はあるけど、拘縮には大変よく効くことがあるんですよ。もし希望するなら手術部長に頼んでみるが、どうですか」

と鍼の治療を勧めてくれた。研究熱心な病院長はいろいろと研究をしていたのである。わらにもすがりたい気持ちで、私は即座に「お願いします」と言った。やがて、多忙な手術部長先生が手術の合間

を見つけては治療をつづけてくださるようになった。

初めての鍼は、確かに気持ちのよいものではなかったが、三回くらいすると、腕の拘縮がゆるんできた。

「先生、拘縮した筋肉の緊張がゆるんできました。鍼はすばらしいです」

私の喜ぶ顔を見て、今度は本格的に鍼治療を継続することになった。院長が推薦してくれたのは札幌医大の近所の笠井雄先生の治療所だった。病院から私と数人の入院患者が、病院の厚意で車を利用させてもらい、雪の降り積む札幌の市内を毎日鍼治療のために通った。

笠井先生は、治療所で治療する一方で、鍼灸専門家を養成する学校の校長先生でもある。数日の治療後、笠井先生は私に、

「森山さんには少し強い鍼を打ちたい、言語障害を治すのはむずかしいんだが、どうだね」

と言われるので素直に、

「お願いします」

と頭を下げた。

火箸ほどにも大きく見えた中国鍼が、急所とされる頭蓋骨のてっぺんや下顎の下に深く打たれるとき、私は目をつむって笠井先生の腕を信じ、神仏に成功を祈ったのである。その後、笠井先生は私に、「あまり人は気がついていないが」と前置きして、右手の親指と人差指の間に鍼を打ちながら、「この

親指を動かす筋肉は早く溶けてなくなるから、気をつけて動かしておかないと、マヒがとれた後で使えなくなる」と注意してくれた。この処置は後日の私をたいへん助けてくれた。

ベッドの上であまり多くの希望は持てないが、朝の白い光を仰ぐとき、「今日も生命があるんだなあ」と、感謝をすることはできる。手の届くところにある小さな目標を一つずつクリアして、私に挑まれた戦いに勝つことを信じて毎日のリハビリを積み上げていく。

冬の窓からは、暗い雲の下に緑の失せた山々が見える。しかし、この荒れ果てた自然も、春が来れば豊かな緑と彩りも鮮やかな花があふれるのだ。

「春になってみる、僕だつてきれいな花を咲かせるから」
今は黙って耐えるしかない毎日である。

職場復帰を夢みる

正月には、入院して以来、初めて外泊が許可された。

マンションの前でタクシーを降りると、雪で滑りやすい石段を一段ずつ上がり、懐かしい部屋に入る。窓から見る風景は光に満ちた夏のそれから、頭がつかえるような黒い雲に覆われた色彩の乏しいそれと変わっていた。

いつの間にか百日以上の入院が続いていたのである。退院の目安は春先と思われたが、職場に復帰すると何が問題になるのか、その問題を解決する方法はあるのか。久しぶりにわが家の食卓に向かい

ながら真剣に検討を始めた。

まず、私の日常の行動を頭に描き、一つ一つその対策を考えてみた。通勤に時間はかかるが、市電を利用すればできるだろう。電話の応対をしながらメモをとるには、両手を同時に使えないので、何か補助具を探さねばならない。

そこで、正月が明けて、病院に戻ると、具体的な訓練に入った。入院して五カ月もたつと平素の訓練の成果で、多少は歩けるようになっており、昔の職場に戻って机の前に座る日を、頭に描いて訓練に励んだ。これは単なる夢とか将来の希望という種類のものではなく、到来するのが確実なことと考えていたので、その対策に腐心したのであった。

そのために私は滑らぬように気をつけながら、たどたどしい足取りで、杖を突きながら白く降り積む雪の札幌を歩く練習をしていた。通勤のために市電を利用することは、電車のステップが高すぎて乗り降りが困難だとわかった。

「金子さん、どうすればいいだろう？ 何か名案はないかな」

訓練に付き添ってくれている金子さんは腕組みして考えながら、

「やっぱりもう少し足の筋肉の力をつけないとむずかしいね」

と、さらに厳しい通勤の練習が必要だと言う。

電話を利用するには、片手ではメモがとれない。

「どうすればいいかな？」

「電話は、肩と首に挟む道具があるじゃない、あれを買ってくれば簡単よ」
いろいろな制約があっても、私の頭の中では、会社人間の私が再び会社に戻って仕事をする日は、近づいていたのだ。しかし、発音能力は、まだ十分とは言えず、これには頭を抱えた。ゆっくりと一語一語区切って話すことが、ビジネス社会で通用するとは思えなかった。この欠陥は最大の課題に思えた。

判断力の欠損は感じられなかった。大きな不安はなかったが、強いて言えば、同時に複数の情報を目と耳から入れながら、とっさに判断するようなことが無理になっていった。そんなことを具体的に詰めて考えると、もつともつと機能回復の水準を上げなければ、私が昔の仕事に復帰することはありえないかもしれぬと思った。回復するにはまだまだ多くの時間が欲しかったが、病気の治療として認められている六カ月の休業期間が終わり、病気休職に移る日は目前に迫っている。いったん休職になると、職場に戻ることはむずかしくなるだろうと、心の中に焦りが高まってきた。しかし、無理を承知で職場に戻ったとしても、周囲の皆さんが私に対して神経質になるだろうな、退院はできそうだが、職場をどうするか、見当もつかなかった。

主治医は、三月中旬になれば退院できるだろう、というご意見だった。訓練は前のおりに進めた。が、階下の病棟婦長から「森山さんが廊下を歩かれて万一の事故があると困る」と苦情が持ち込まれるというようなこともあった。

歩く訓練ができなくなると、とたんに暇になった。快適な室温に調整されたラウンジに座って、窓の外に輝く雪景色を眺めていると、私は病院に入院しているのを忘れ、何かスイスあたりのサナトリウムにいるような錯覚にさえ陥った。自分の体が半身マヒだ、ということすら忘れた。遙かな遠い目標に向けて歩くことを投げ捨てて、このままのんびりと自然の中に没入したい気分になったりもしたが、また、このままでは自分ではだめになる、こんな想いも脳裏をかすめた。

閑職への辞令、そして退院

しかし、二月の末に突然、「三月十六日付で東京の人事部付が発令されましたので、お伝えします」という閑職への転勤が伝えられた。

前の職場に戻りたいという、私の甘い希望は無残に打ち砕かれてしまった。会社ではいったん発令された辞令が取り消されることはない。どれほど無念でも「はい、わかりました」と答えるしかなかった。

寒い間は暖房のきいた病院で機能回復の訓練をして、春の暖かい日差しとともに横浜のわが家に戻り、私の人生設計をやり直さねばならない。そこで、妻を横浜に行かせ、古くからの主治医である塩田善朗先生と今後の治療計画を相談してもらった。塩田先生は近所でもあり、父の最後をお願いしたり母も診ていただいたり、二人の娘もときおりお世話になっていた方で、しかも札幌に行く前に私の糖尿体質改善の指導をしてくださっていた成人病の専門家だった。私たちが安心してご相談できる方

だったのである。

やがて、発病して半年がたったが、手や足のマヒが残り、右手は完全な廃用になり、さらに右足も歩行が困難という労働不能の障害者になっていたのである。そこで札幌市から身体障害者一種二級との認定を受けて、障害者手帳を三月の中旬に受け取り、病院には別れを告げた。職場復帰が、またどうして無理な状態だということは、私自身にもよくわかってはいたが、札幌でやりかけの仕事も、やろうと思っていた計画もある。致し方ないことと思いつつも、やはり無念であった。また横浜へ戻ることには、ほっとする部分があるものの、たった四年間だったが、札幌には限りない愛着もあった。

札幌グランドホテルに二泊し、転宅の支度と挨拶をすませた。三月十九日、北海道の大勢の皆さんの見送りを受け、激励の言葉と記念の花束をちょうだいして、私もお世話になった皆さんに心からお礼を申し上げ、お別れをしたのである。

しかし、北海道を去る私の心は空しかった。

そのとき妻は

何十年もの年月、会社中心に生きてきた夫は、いま病を得て不自由な体を休めていることを忘れたかのように、会社のことを考えていました。毎日、何かと連絡のため会社へ行く用を指示しましたし、会社の方も来てくださいました。

また、倒れたと聞いて、あちこちから、中には九州からまで見舞いに駆けつけてくださる方もいらっしゃいました。四階の病室にいる間はお目にかかれず残念がっていましたが、お会いできるようになってからは、お話がはずんで、顔がゆがんでしまうほど（マヒがあるので疲れるとさらにひどくなります）夢中になってしまいます。会社と切り離れた人生は考えられない人なのだと、つくづく思いました。

前の年にいただいた定年延長規定を忘れていたのでしょうか、夫は会社に帰ることのみを考えていたようです。私もそのことは言い出せず、心配でしたが、どうか異例が認められますようにと、それにはラッシュもない通勤に便利で容易な札幌にこのまま置いていただけるようにと念じました。東京で本格的なリハビリに専念してくださいと、転勤の辞令をいただいたときは、さすがに淋しさはひとしおだったと思います。ちょうどあたりは雪に囲まれた季節でしたので、外へ出て気分を紛らすこともできず、リハビリにも限界が来ておりました。

札幌を去る日は大雪でした。しかしたくさんの方々が見送りに来てくださいました。

「つらい思いがとおりでしょうが、札幌に私たちがいることを忘れないで

ください」と、温かな握手をされたとき、夫の生きてきた世界が、単に会社の仕事上に留まらず、より人間的に豊かなものであったことがしのぼれて、うれしく感謝しました。横浜に帰って、気候温暖、冬でも外を歩ける土地で、夫に存分のリハビリに専念してもらい、もう一度元気になって皆さまのもとへと、私も考えました。

しかし、普通なら、すでに定年退職し、悠々自適の生活に入っていて不思議はない年齢です。夫は元気だったら、退職しても何か仕事をしていかもしれませんが、この際、仕事はいつさい忘れてもらうことにいたしました。札幌への転勤で、娘たちとは離れ離れの生活をしてきました。仕事で、一家で過ごす時間もあまりなかった長い年月でした。早晚巣立つてあろう二人の子供のために、寄り添って暮らす家族らしい生活を味わいたいとも思いました。

経済的には不安もありましたが、考えれば切りがありません。これまで体を損なうまで働いてもらって、蓄えらしいものはありませんが、小さな家がありました。これを大事にしてゆけば、どうにかなりそうにみえたこともありがたく、いざとなったら故郷に帰ることも考えていましたので、あまり案じませんでした。恵まれているほうだったと思います。